

事業名

希望が丘夏休みわんぱくキャンプ

団体名

公益財団法人滋賀県希望が丘文化公園

背景・課題

【目的】

参加者自身が自分と向き合い、まわりを見つめ、チームの一員として3つの項目の目的とする。

- ◎自分の参加動機とわんぱくキャンプの目標をしっかりと認識する。
- ◎そのために皆と考え方ややり方を話し合い工夫する。
- ◎参加者同士協力し、目標達成を目指して粘り強く取り組む。



7日間の自然の中での生活を通して、「自分で考えて行動する力」と「仲間と協力して物事を解決する力」の2つの力を習得し、互いに心(非認知能力や生きる力等)を成長させる



○「生きる力」や「非認知能力」への、こどもたちの関心の薄さは、ここ数年のコロナ禍の弊害が大きな要因であり、対面経験の欠如やフィールドワークの体験機会の減少、ネット環境における仮想体験への偏りなどが起因し、また学校現場でこういった機会が減少している。

特に小学生の成長における「体験」の繰り返しより

- ・相手の気持ちを読み取る力
- ・自分の気持ちを表現する力
- ・自分を好きだと思う気持ち
- ・他者への思いやりの心 など、難しい状況であることが現状であり、解決していく課題と考える。

○自然や環境への理解不足も、状況は左記と同様である。SDGsは、学校で学ぶ機会は増えているが理論や卓上での議論が多く、実体験での行動は難しく、提示されたことは取り組むが、自分を取り巻く環境で自ら考え、継続して行動する機会は少ないことが現状であり、この方向性を大切にすることが課題である。

事業趣旨

自然を楽しみながら学ぶ場を提供し、びわ湖版SDGs「マザーレイクゴールズ(MLGs)」の枠組みの中で、このキャンプ事業において、以下4項目の目標を定め、その達成のため、子どもたちが自主性や協調性を身につけ、野外活動や自然活動の各種プログラムを体験してもらう。

この7日間の体験で、参加者の「生きる力」や「非認知能力」の向上に工夫を凝らし、心身の健全な発達を促し、また環境負荷低減について少しでも理解と行動が今後できるようにする。特に心の成長である、「思いやり」「強い気持ち」「絆」等そして「感動」の主観的な指標も大切に、事業を実施する。

○滋賀県が2021年7月1日、マザーレイクゴールズ推進委員会が掲げた「Mother Lake Goals変えよう、あなたと私から」から事業プログラムを展開。具体的には13の項目から以下の4項目に絞る。

3「多様な生き物を守ろう」

- ・身近な自然を知る、学ぶ / ・間伐等、森林保全活動

4「水辺も湖底も美しく」

- ・ゴミ排出量の削減 / ・マナーを守っての行動

5「恵み豊かな水源の森を守ろう」

- ・里山の保全

10「地元も流域も学びの場に」

- ・自然体験プログラム

上記の4項目を中心に、計画、実践を行う。

※参加者にはわかりやすく、できるだけ簡易に安心して取り組んでいただくよう、工夫する。

事業名

希望が丘夏休みわんぱくキャンプ

団体名

公益財団法人滋賀県希望が丘文化公園

事業の内容

テーマ:心から心へ ～自立と協力の7日間～／サブタイトル:まほう使いからわんぱくキッズへの挑戦状 ～僕らの7日間冒険記～

【7日間で身につける力】 各日程でMLGsを通して、非認知能力である「主体性、協調性、目標に向かって頑張る忍耐力」を身につける

- 8月11日(日) 1日目 - 仲間を見つけて仲良くなれ -
- 8月12日(月) 2日目 - 生き残るための術を身につけろ -
- 8月13日(火) 3日目 - 自然と共にチームスキルを身につけろ -
- 8月14日(水) 4日目 - 自分たちの力を試せ -
- 8月15日(木) 5日目 - 思い出を作れ -
- 8月16日(金) 6日目 - 魔法使いに成長を見せつけろ -
- 8月17日(土) 7日目 - 気球を完成させろ -



ハイキング



ロープワーク



水のプログラム



秘密基地づくり

成果及び今後の展開

アンケート結果とリーダー間での考察から、IKRとMLGsの関連で、特に2つのセットプログラムである「自然への関心」「恵み豊かな水源の森を守ろう」のセット、「野外技術・生活」「地元も流域も学びの場に」のセットは、計画段階から意識しながら組み立てたこともあり、この7日間の長期自然体験の効果が大きかったので、ここを基本に今後継続したいと考えている。一方でアンケートでは、優位さが少ない項目について、検証を重ね、成長につながる時系列等に変更し、長期自然体験の時間の長さのメリットを生かして取り組んでいきたい。具体的には、プログラムの効果を上げ、子どもたちの成長を促すには、「体験と振り返りのバランス」を重視し、プログラム構成や相互のつながりを再検討する。特に、小学4.5年生がプログラムを通じて成長に気づける仕組みを、活動後の振り返りの時間を確保し、成功体験や挑戦の成果を自覚できる場を設けることで、心理的社会的能力の向上が期待できるので、こどもも重視したい。

普及に関して、来年度プログラムの構成や運営における改善点を反映し、今年度の結果と来年度の結果を比較することで、効果の変化やさらなる改善の方向性を明確にすることが可能となる。また、得られたデータや成果を公開し、プログラムの具体的な実践方法や成功事例を広く発信することで、他の教育現場や地域にも参考にされ、普及が進むと考えられる。